

西部開発事業（畑地帯総合土地改良事業）

—緊急発掘調査報告—

# 与地原B遺跡

1977

伊那市教育委員会  
南信土地改良事務所

## 序

伊那市の郊外西箕輪地区は、経ヶ岳山麓から、権兵衛峠に至る山麓線上に発達した集落が展開している。これらの集落は北部に大泉川、中部に大清水川、南部に小沢川が流れ、それらによって形成された河岸段丘と、山麓線より押し出した扇状地、いわゆる複合扇状地に立地している。

これらの地区には、必ずと言っていい程に湧水があり、したがって、原始人達はそれを求めて、その地に住みついた。それが遺跡であります。

昭和51年12月より西箕輪与地地区で、西部開発事業が開始されることになり、この、与地原B遺跡の緊急発掘調査を実施することになった。幸いに、南信土地改良事務所、長野県教育委員会文化課、文化庁の御配意により、予算もつき、団長に友野良一先生をお願いして、調査団を編成し、発掘に着手した。発掘にとりかかって、毎日、寒さと、霜柱、あるいは雪に悩まされた連続であったが、皆様の献身的な御協力によって調査が無事終了出来ましたことは、誠に喜びにたえません。

与地原B遺跡の調査の成果は報告書をみてもらえばわかりますが、ここで、一応簡単にまとめて述べておくことにします。

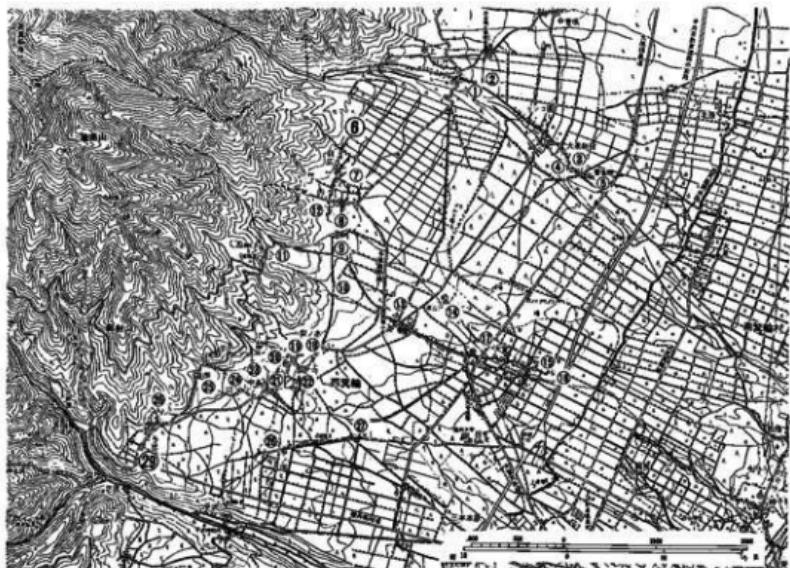
与地原B遺跡では土括8、ロームマウンド1であります。

ここに、調査報告書の発刊にあたって、南信土地改良事務所をはじめ、長野県教育委員会文化課、文化庁、調査団の諸先生、発掘作業員の皆様に衷心より謝意を表する次第であります。

昭和52年3月10日

伊那市教育委員会  
教育長 伊 沢 一 雄





第1図 西箕輪地区遺跡分布図

遺 跡 の 名 称

- |           |          |         |         |
|-----------|----------|---------|---------|
| ① 中道南     | ② 横 烟    | ③ 久保田   | ④ 塚 烟   |
| ⑤ 高 根     | ⑥ 北 割    | ⑦ 田 代   | ⑧ 古屋敷   |
| ⑨ 金 鑄 場   | ⑩ 上 渕    | ⑪ 藏鹿山麓  | ⑫ 経ヶ岳山麓 |
| ⑬ 西箕輪小学校北 | ⑭ 伊那養護学校 | ⑮ 熊野神社  | ⑯ 在 家   |
| ⑭ 大萱西     | ⑯ 跛屋敷    | ⑰ 宮垣外   | ⑰ 天庄1   |
| ⑮ 天庄2     | ⑰ 上 戸    | ⑱ 富士垣外  | ⑱ 堀の内   |
| ⑯ 小花岡     | ⑲ 中 の 原  | ⑲ 下 の 原 | ⑲ 与地山手  |
| ⑳ 与 地 原   |          |         |         |

No.	遺跡名	所在地	旧石器	縄文時代					弥生時代			古墳時代		奈良・平安代		中世		備考 (長野県遺跡地図番号)
				草	早	前	中	後	晩	前	中	後	土	須	灰	陶	磁	
1	中道南	西箕輪吹上				○												
2	桜烟	"				○												
3	久保田	大泉新田				○								○				
4	塚烟	"				○								○				
5	高根	"				○												
6	北割	羽広				○					○							(2602)
7	田代	"				○												(2601)
8	古屋敷	"				○					○							(2600)
9	金鋸場	"				○								○				(2599)
10	上構	"					○○						○○○○○					財本と同じ
11	藏鹿山麓	"	○															
12	経ヶ岳山麓	"												○	和鏡			
13	西箕輪小学校北	大萱										○						
14	伊賀郡義学校	" 8274	○										○					
15	熊野神社	"				○						○○						(8678)
16	在家	" 7438～7444外				○												(8679)
17	大萱西	"	○			○												
18	殿屋敷	梨ノ木				○						○○						(2608)
19	宮垣外	中条				○○						○○○○						(2607)
20	天庄1	上戸				○						○○						(2606)
21	天庄2	"				○												
22	上戸	"				○												
23	富士垣外	中条				○												
24	堀の内	"				○												
25	小花岡	花岡				○○						○○						(2605)
26	中の原	中の原				○												
27	下の原	上戸				○												
28	与地山手	与地				○												
29	与地原	"				○												(2609)

第1表 西箕輪地区遺跡一覧表

## 凡 例

1. 今回の発掘調査は西部開発に伴なう、県営畠地帯総合土地改良事業で、第4次緊急発掘調査にもとづく報告書とする。
2. この調査は、県営畠地帯総合土地改良事業に伴う緊急発掘で、事業は長野県南信土地改良事務所の委託により、また国県市の補助金のもとに伊那市教育委員会が実施した。
3. 本調査は、昭和51年度中に業務を終了する義務があるため、報告書は図版を主体とし文章記述もできるだけ簡略にし、資料の再検討は、後日の機会にゆずることとした。
4. 本文執筆者は、次のとおりである。担当した項目の末尾に氏名を記した。

小池政美 萩原 茂

◎図版作製者

◎遺構および地形

友野良一、小池政美、田畠辰雄、萩原 茂

◎土器拓影及び実測図

友野良一、小池政美、田畠辰雄、萩原 茂

◎写真撮影

◎発掘及び遺構

友野良一、小池政美、田畠辰雄

5. 本報告書の編集は主として、伊那市教育委員会があたった。

## 目 次

目 次.....	( 6 )
挿図目次.....	( 7 )
表 目 次.....	( 7 )
図版目次.....	( 7 )
第Ⅰ章 遺 構.....	( 8~13 )
第1節 土 塗.....	(10~13)
第2節 ロームマウンド.....	(13)
第Ⅱ章 遺 物.....	(14)
第1節 土 器.....	(14)
第Ⅲ章 ま と め.....	(14)

## 目 次

### 挿 図 目 次

第1図 西箕輪地区遺跡分布図.....	(3)
第2図 地 形 図.....	(8)
第3図 造構配置図.....	(9)
第4図 第1・2号土拵実測図.....	(10)
第5図 第3号土拵実測図.....	(11)
第6図 第4号土拵実測図.....	(11)
第7図 第5号土拵実測図.....	(12)
第8図 第6号土拵実測図.....	(12)
第9図 第7号土拵実測図.....	(13)
第10図 第8号土拵実測図.....	(13)
第11図 第1号ロームマウンド実測図.....	(13)
第12図 土器拓影.....	(14)

### 表 目 次

第1表 西箕輪地区遺跡一覧表.....	(4)
---------------------	-----

### 図 版 目 次

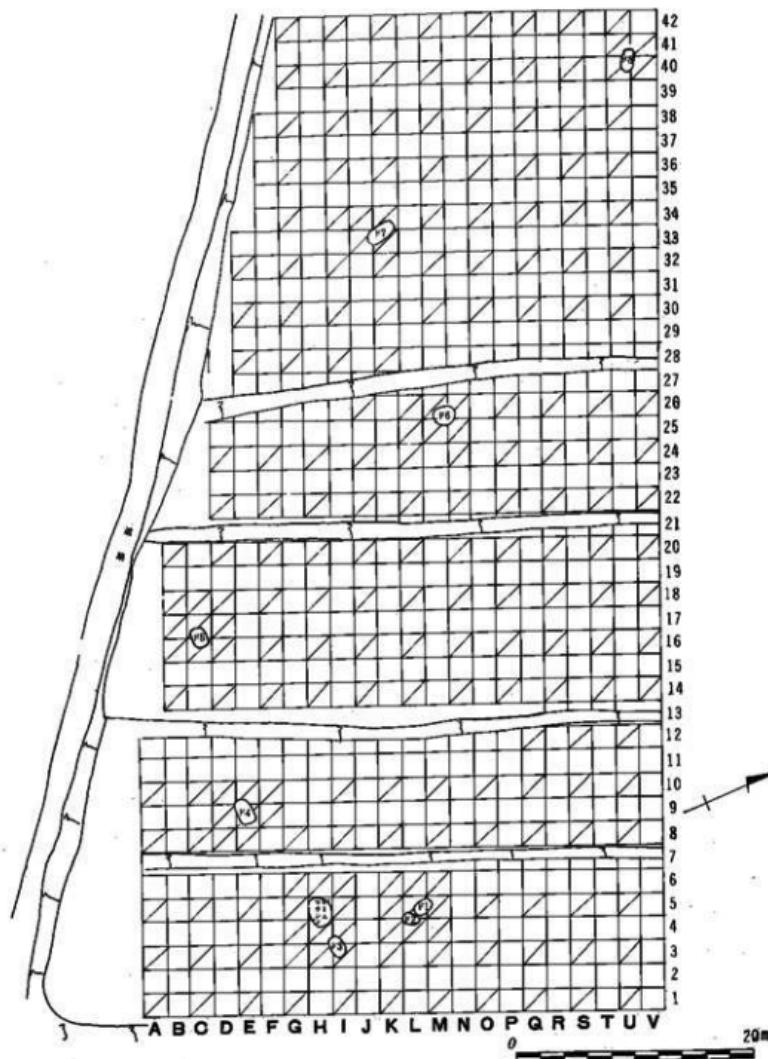
図版 1 遺跡全景
図版 2 造 構
図版 3 造 構
図版 4 造 構

# 第Ⅰ章 遺 構



第2図 地 形 図

第1章 造 構



第3図 造構配置図

## 第1節 土括

## 第1号土括 (第4図、図版2)

発掘地域の最も東側の水田に発見された土括で、L5～M5の二つのグリットにまたがっているローム層を掘り込み、南北1m55cm、東西85cm程の規模を持っている。平面プランでは北側が隅丸方形形状になり、南東の一隅は幾分へっこんだかっこうをしているが、全般的には隅丸長方形を呈している。壁高は北側ではほとんどないような状態を呈し、南側は30cm前後を測定でき、状態はやや内傾が強くなっている。この壁面は軟弱であった。床面は軟弱で、南半分はやや水平であるのに反して、北半分はこまかに凹凸が著しかった。

覆土内より少量の炭化物はみられたが、遺物は何も出土しなかった。

## 第2号土括 (第4図、図版2)

発掘地区の最も東側の水田の耕作土層面より30cm位下った第4層のローム層を掘り込んで構築された土括で、北側では第1号土括と接している。その規模は南北95cm、東西1m25cm程であって、プランは隅丸台形状を呈している。

壁高は東側では10cm、西側は15cm位は測定でき、軟弱であった。状態は東側では内窓、西側では内傾気味であった。床面はほぼ水平で、軟弱であった。

遺物は何も出土しなかったが、少量の炭化物の検出をみた。

## 第3号土括 (第5図、図版3)

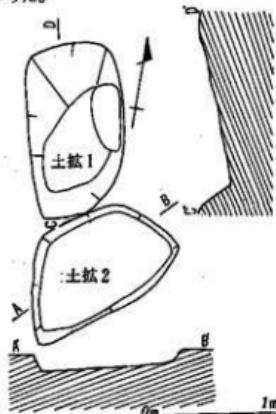
この土括は第1号土括、第2号土括、ロームマウンドの三つの遺構に隣接して、その東側の位置に検出された。

第4層のソフトローム層を掘り込み、南北1m、東西1m70cm程の規模を有し、北側は円周状を、南側は直線状を呈し、全般的には長円形状の平面プランを呈している。壁面は垂直に近く、壁面上部はソフトローム層で、下部はハードローム層になっていた。深さは東側で75cm、西側で1m5cm位を測定できた。床面はハードローム層中につくられており、大般水平であった。床面の中央部よりやや南側によったところに直径10cm、深さ20cm程のピットが穿けてあった。用途については現在のところ不明である。

覆土中より少量の炭化物の検出はみられたが、遺物の出土はなかった。

## 第4号土括 (第6図、図版3)

この遺構はソフトローム層面を掘り込み構築された土括である。規模は南北1m15cm、東西1m80cm程で、深さは70～75cmの長円形状プランを呈している。壁の状態は内傾気味であった。高さは

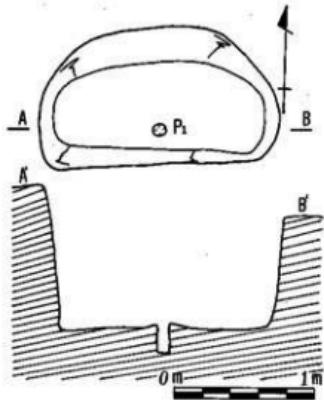


第4図 第1・2号土括実測図

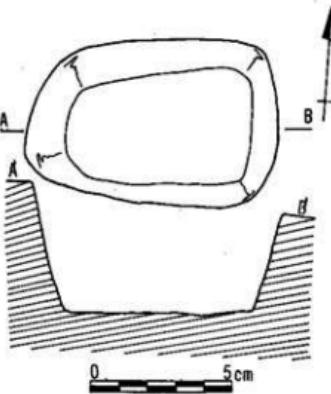
## 第1章 遺構

東側では70cm、西側では90cm程あり、壁面はフラットで凹凸はわずかであった。壁面の上部はソフトローム層、下部はハードローム層でできていた。

床面はハードローム層中につくられ、ほぼ水平となっていた。覆土中より少量の炭化物は認められたが、遺物は何も出土しなかった。



第5図 第3号土塗実測図



第6図 第4号土塗実測図

### 第5号土塗（第7図、図版3）

東側より数えて3段目の南側道路面に近い、C16、C17に発見された土塗である。ソフトローム層面を掘り込んで構築され、その規模は南北1m10cm、東西1m50cm、深さは65cmを測定できる。プランは隅丸方形状を呈している。壁の状態は東側で内弯気味で、西側は内傾状であった。

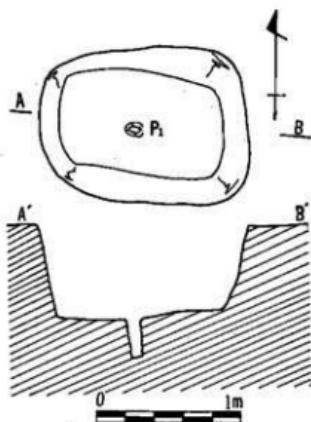
床面はハードローム層面にあり、水平状になっていた。中心部と思われる位置に直径10cm、深さ25cm位のピットがあけてあった。覆土中より少量の炭化物の出土はみたが、遺物の出土はなかった。

### 第6号土塗（第8図、図版4）

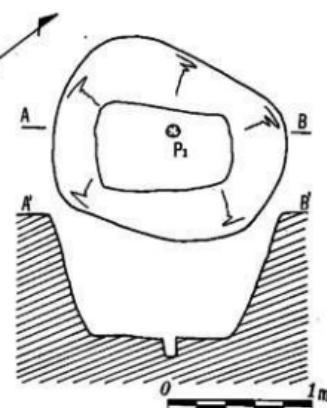
本遺構は4段目の水田のはば中央よりやや西よりのN25～N26 O25～O26の4グリットにまたがって発見された。南北1m35cm、東西1m62cm程の規模で、円形プランを呈しており、深さは80～85cmである。壁の状態は東、西ともに内傾が強く、壁面上部はソフトローム層、下部はハードローム層でつくられ、平坦面になっている。高さは東は85cm、西は80cm位を測定できる。

床面はハードローム層中にあり、大般水平となっていた。平面プランは上部は円形状で、床面近くでは隅丸方形状になっている。床面上の北側の方に小さな円形状のピットがあり、深さは13cm位であった。

覆土中より少量の炭化物はあったが、遺物の出土は全くなかった。



第7図 第5号土塗実測図



第8図 第6号土塗実測図

## 第7号土塗（第9図、図版4）

表土面より30cm位下ったソフトローム層面を掘り込んで構築された土塗であった。検出された所は東側より五段目の水田で、J33～K33、J34～K34の4グリット中であった。その規模は南北に長くて2m64cm、東西に短かくて1m12cmを算していた。平面形プランはところどころに幾分角張った様相を呈してはいるが、全般的には長円形状のかっこうをとっている。また底面近くでは、壁面を面取り状にしており、長方形に近くなっていた。

壁は北側では65cm、南側では90cm位を測り、内傾がやや強くなっていた。上部はソフトローム層下部はハードローム層を成していた。床面はハードローム層面に構築され、大般平坦であった。床面の中央部よりやや東側へよったところに直径10cm、深さ37cm程の小ピットがあけてあったが、用途については現在の段階では不明である。

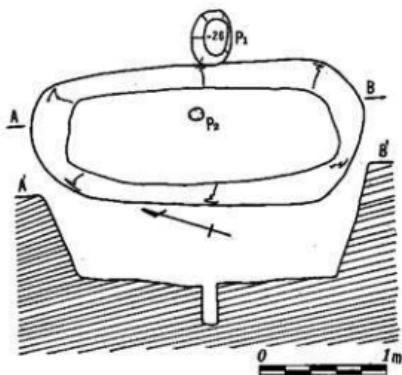
## 第8号土塗（第10図、図版4）

この遺構はVライン状に発見された唯一の土塗であつて、表土面より40cm位下ったソフトローム層面を掘り込んで構築されていた。プランは隅丸方形状で、規模は南北97cm、東西1m40cm、深さは30cm位であった。壁は全周しており、全て30cm前後位であり、幾分内傾状態をとっていた。深さが他の土塗に比較して浅いために、壁はソフトローム面であった。

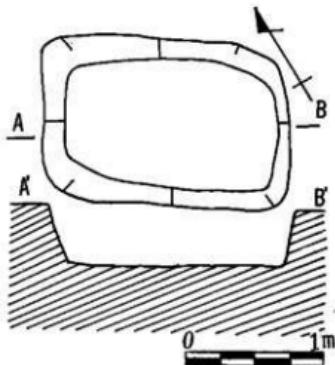
床面はソフトローム層面につくられ、かたくたたいてあり、ほぼ水平状になっていた。覆土中より、少量の木炭の検出はみられたが、遺物の出土は何もなかった。

以上、8個の土塗の説明をしてきてみたが、共通な個所は多くの点で認められるが、遺物の出土が何もないために時代決定が全く不可能である。

（小池 政美）



第9図 第7号土拵実測図



第10図 第8号土拵実測図

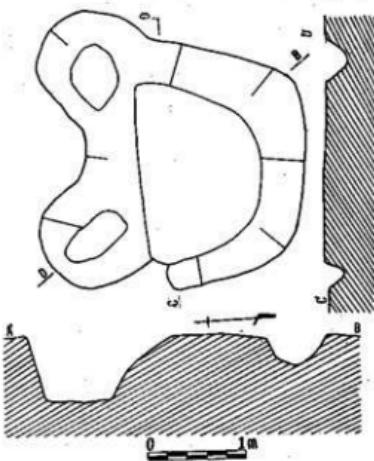
## 第2節 ロームマウンド

### 第1号ロームマウンド（第11図、図版2）

調査地の東端部、第3号土拵内西側に位置している。マウンドは南北2m25cm、東西2m70cm程、高さは20~70cmで、南側には巾50cm、深さ70cm程、北側には巾45cm、深さ30cm、東側には巾35cm、深さ20cm程、西側には巾50cm、深さ25cm程の溝が回わっている。

形状は南西と南東の隅は丸く突び出している。北西と北東の隅は崩丸方形状になっている。前者の二つの隅の突起部にはそれぞれピットが附隨している。

頂部は黒土層が混合したような状態を呈し、表面はほぼ水平状であった。頂部から傾斜面に移行する面は若干内傾斜を呈し、崩落しないようにならかにたいたいた痕跡が認められた。マウンドの形成土は大部分がソフトロームであり、なかにブロック状に黒色土やハードロームが混入していた。このブロック状の土のなかより少量の木炭の検出はみられたが、遺物は何も検出されなかった。よって時代は不詳。（荻原 茂）



第11図 第1号ロームマウンド実測図

## 第Ⅱ章 遺 物

### 第1節 土 器

第12図の（1～3）の土器片は全て表面採集によるものである。（1～2）は同一個体の破片と思われる。表面に細線を無線に不規則状に施してある。明褐色を呈し焼成は中位で、少量の長石粒を含んでいる。

（3）は器面が剥落が著しい。ハの字状に沈線を配している。赤褐色を呈し、焼成は中位で少量の長石粒を含んでいる。（1～3）は加曾利E期に含まれるであろう。その他の遺物として近世の陶器片が少量出土したのみであった。

（荻原 茂）



第12図 土 器 拓 影

## 第Ⅲ章 ま と め

与地原遺跡は伊那竜西地区で西部開発が行なわれる計画が明らかになった折りに発見された新しい遺跡である。与地の原は水の点で遺跡地としてはあまり期待が持てそうな状態ではなかった。実際に発掘してみると、当初、思っていたとおり土塙8、ロームマウンド1、遺物としては土器片3と近世陶器片少量というさびしい結果となってしまった。

土塙は第1号土塙、第2号土塙を除いて、他の6つの土塙は上面はそれぞれ異っていたが、下部は方形に近いかたちをとっていた。第3号土塙、第5号土塙、第6号土塙、第7号土塙の4つの土塙の床面には直径10cm位の小さなピットが大般同じ位置にあけられていたが、何に使用されたものかは現在のところ不明である。また土塙内の出土遺物は全くなかったので時代決定は不可能である。想像するに形態や造りからして近世時代の墓塙ではないかと思われる。

ロームマウンドは今まで発見されたものと大差はなかった。遺物は加曾利E期の新しい方に属しているものと思われる。

（小池改美）

# 図 版

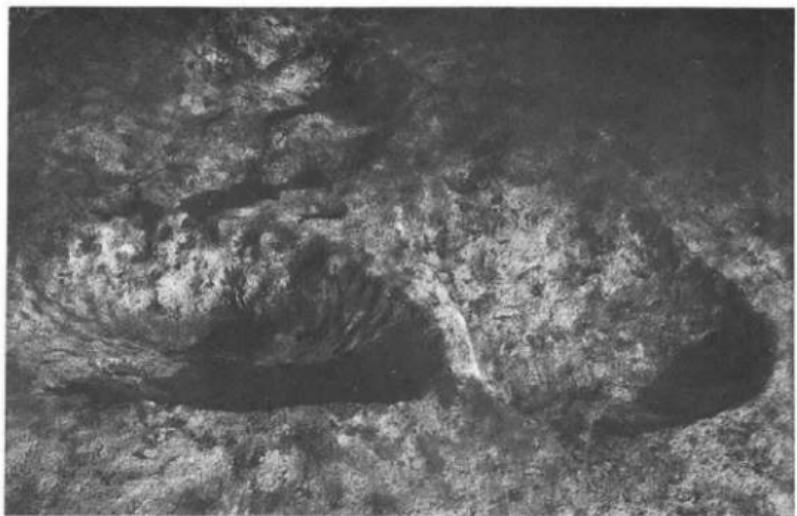


遺跡地を東側より眺む



遺跡地を西側より眺む

図版1 遺跡全景

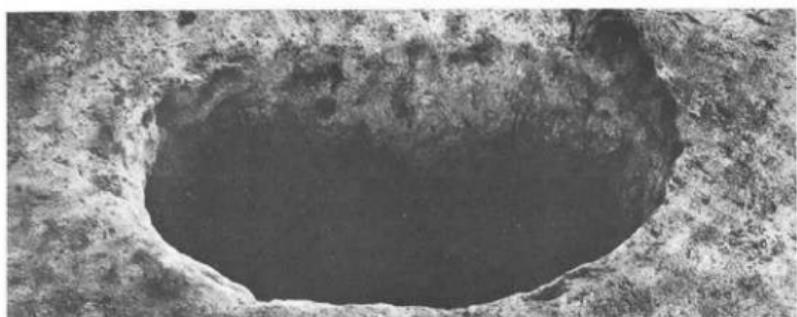


第1号・2号土塗

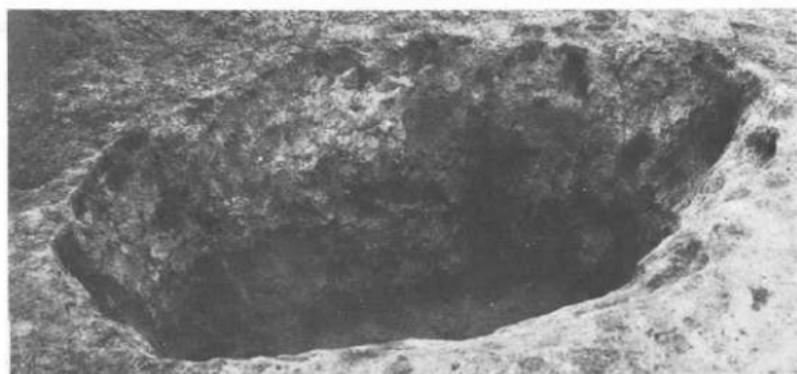


第1号ロームマウンド

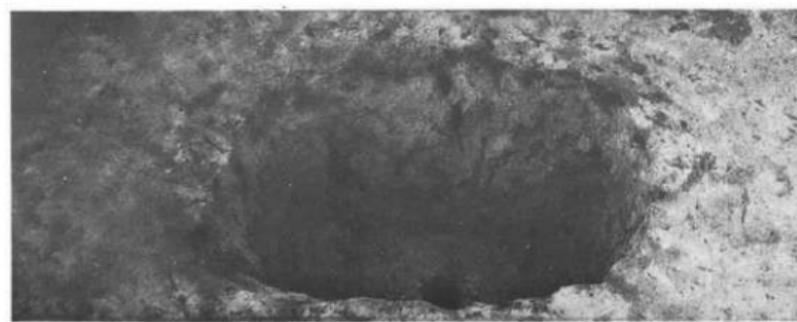
図版2 遺構



第3号土块



第4号土块



第5号土块



第6号土坑



第7号土坑



第8号土坑

